様式 C-7-2

自己評価報告書

平成　21 年　4 月　16 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006 ～ 2010
課題番号：18520296
研究課題名（和文）　話しことば談話における文法的機能語の語用標識化

研究課題名（英文）
'Pragmaticization' of grammatical function words and constructions in discourse

研究代表者
藤井　聖子（FUJII SEIKO）
東京大学　大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：70165330

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：(1) 文法的機能語; (2) 語用標識化（文法化）； (3) 語用標識 ;(4)接続形態素; (5) 発話末; (6) 「談話と文法」; (7) 構文理論; (8)用法依拠モデル

１．研究計画の概要

本研究は、日本語と英語の話しことば談話における心的態度表意メカニズムを、実際の談話データの分析を通して明らかにし、その機能と表意手段の文法を、「語用標識化」の観点から動的に探究することを目的とする。本研究課題で焦点をあてるのは、典型的な「文法化」現象のさらに先に起こってくる現象、すなわち、「文法的機能語」が、本来の統語的特質を多少薄め、語用論的機能を強化し、話者の談話における命題態度および発話態度の表意手段として使用され「語用標識」として定着する言語現象である。本研究では、この言語現象を、「語用標識化」とよぶ。この事例研究として、特に、① 節と節を繋いで複文を作る接続形態素、および、②「と」で標識される引用節(句)構文の語彙的・構文的分析と記述に頂点をあてて分析する。

２．研究の進捗状況

上記目的を踏まえた分析のために、成人および子供の話しことば談話データを収集し、言語分析用資料を構築し（収録視聴覚メディアの電子ファイル化・精密な転記・転記ファイル化）、話しことば分析における諸理論（発話単位 Intonation Units, 転記法理論、Intonation Units 等）を吟味し、「談話と文法」理論の観点から「談話と文法」に関する分析を行った。

成人言語使用の分析においては、「談話と文法」理論の観点から、「語り」の談話構造とその文法、談話におけるモダリティ表現、Intonation Units と統語構造との関連性、Intonation Units の機能構造、選好的項構造、談話における連接・接続、談話における指示メカニズムとその文法等を分析した。さらに、これらの研究問題の日英語対照を行った。平行して、子供の文法能力・談話能力の獲得に関して、5、7、9 才児の語り談話データに基づき、子供の語りの談話構造の芽生え・発達とその表現手段としての文法の発達を分析した。

これらの研究成果は、国際構文理論学会 (Fujii 2008); 国際言語学者会議 (Fujii 2008); 国際語用論学会 (Fujii 2007);言語処理学会 (藤井・内田 2009, 内田・藤井 2009; 藤井・上垣 2008; 上垣・藤井 2008; 内田・藤井 2007; 石田・藤井 2006)、言語科学会 JSLS (Kurumada & Fujii 2006)、日本言語学会 (藤井・上垣 2008, 作田・藤井 2006);国際構文理論学会 the 4th International Conference on Construction Grammar (Kurumada & Fujii 2006；Sakuta & Fujii 2006) などで発表した。これらの学会の Proceedings 予稿集の掲載論文に加え、Benjamins 出版の Pragmatics & Beyond, volume 151 (Fujii 2006) や Pragmatics and Language Learning, volume 11 (Houck & Fujii 2006) などレフリー付の著書・雑誌で出版した。

またこの間、『談話と文法』という研究へのアプローチ・理論・手法・先行研究を、授業・セミナーおよび共同研究を通してメンバ

ーの大学院生に紹介・導入し、共同研究を進める中で複数のモジュールとなる修士論文のための研究を、さらに、話しことば談話における文法研究という趣旨・枠組みに基づく博士論文（加藤陽子「話し言葉における引用表現の研究――引用標識に注目して」2008）が完成した。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

理論的考察、および、事例研究に関してして、当初の目標に添って順調に進捗・進展している。

４．今後の研究の推進方策

事例研究一部と縦断的データ(子供の談話産出の長期継続的)収集に関しては継続しつつ、分析のまとめをうるとともに、研究成果を学会等で発表する。さらに研究成果報告書を作成する。

５．　代表的な研究成果

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 １７件）

①Houck, Noel & Seiko Fujii. Delay as an interactional resource in native speaker-nonnative speaker academic interaction. In Bardovi-Harlig, Kathleen, Félix-Brasdefer, César J., and Omar, Alwiya. (eds.), *Pragmatics and Language Learning*, volume 11, 29-53.　Manoa, HI: Second Language Teaching and Curriculum Center University of Hawaii. 2006. 査読有り

〔学会発表〕（計 ２１件）

① Fujii, Seiko. The antecedent-only conditional constructions. A paper presented at the fifth International Conference on Construction Grammar (ICCG5), Austin, .U.S.A. 2008. 査読有り

② Hasegawa, Y, K. Ohara, S. Fujii, R. Lee-Goldman & C. J. Fillmore. Constructions for measurement and comparison in Japanese and English. The fifth International Conference on Construction Grammar (ICCG5), Austin, .U.S.A.　2008. 査読有り

③ 藤井聖子・上垣渉(2008)「支援動詞構文における事態性名詞と動詞との項共有と連結性：『日本語コーパス』を用いた分析」日本言語学会第 136 回大会. 査読有り

〔図書〕（計　４ 件）

① Fujii, Seiko. Modality, tense and aspect in Japanese conditionals. Current Issues in Unity and Diversity of Languages.[Collection of the papers selected from the CIL 18, held at Korea University in Seoul, on July 21-26, 2008] 2009. 査読有り

② 藤井聖子 (2009)「所謂引用助詞「と」が標識する構文の用法再考―フレーム･フレーム要素・フレーム間関係の観点から―」『特定領域研究「日本語コーパス」平成 20 年度公開ワークショップ（研究成果発表会）予稿集』213-220. (2009). 査読なし

③ 藤井聖子「話しことばの談話データを用いた文法研究： 話し言葉で構文機能が強化する? ―「ーないと」「ーなきゃ」「ーなくちゃ」の文法― 」長谷川寿一・伊藤たかね・Ｃ．ラマール（編）『心とことば――進化と認知科学のアプローチから』東京大学出版会 2008. 査読なし

④ Fujii, Seiko.　Quoted thought and speech using the *mitai-na* noun-modifying construction. Satoko Suzuki (ed.), *Emotive Communication in Japanese*, pp 53-95. Pragmatics & Beyond 151. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company. 2006. 査読有り

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0 件）

○取得状況（計　0 件）

〔その他〕